

ホールで学び、自分の演奏に生かすために

学生審査員に初挑戦!

～ 2005年度グランプリ・金子一朗氏による レクチャーも開催

今年初めて導入された学生審査員。

特級セミファイナルにて実際に演奏を視聴して評価するという企画を通して、客観的な聴き方を体験し、自らの演奏に生かしてもらうのが狙いです。

前日には金子一朗氏(2005年度特級グランプリ・評議員・フェスティバル実行委員)による事前レクチャーが開催され、指導者を含む80名が集まり、「聴くポイント」を予習しました。その内容をダイジェストでお届けします。

(取材:菅野恵理子)



誰もが
正しいと思う指標に、
どれだけ達しているか?

コンクールでは審査員個人の価値観にある程度左右される上、タイプの異なる審査員の評価が集計されて順位が決まります。受ける方も聴く方も、それを常に念頭においておくべきでしょう。1位でなくてもその後の研鑽で、超一流の演奏家になる例は大いにあります。

今回の企画では個人的な環境や嗜好に左右されず、「これは誰もが正しい」と思うような合理的な指標にもとづいて、そこにどの程度到達しているのかを聴き取るのが目標です。コンクールは受ける時ではなく、受けた後で自分がどう勉強・研究して研鑽するのが最も重要です。だからこそこの企画は、演奏を審査することより、「自分の長所短所をどう見つけて修正していくのか」に直接関わっています。

16個挙げた審査項目の相当数がアナリーゼの考え方に近いです。「楽譜を読める」というのは表面的なことではなく、作曲家が何を考えたの

かを含めて読み取ること。現代は、作曲家が書いた情報を全て読み解いて表現するのが主流です。ぜひ自身の演奏に役立つものと考えてもらえれば幸いです。(既存の審査項目に金子氏が加筆したもの)

16の審査項目とは?

(1) 音の正確さや明確さ

ホールの残響があるため聴き取るのは難しいが、重要なのはタッチの確実さとホールの隅々まで響いていく音。素晴らしい演奏は弱音でもホールの隅まで伝わります。

(2) 音色の美しさ

音色が美しくても時代様式に沿った適切な表現ができていないのはいかかなものでしょう? 例えばバッハをロマン派のように、クープランやラモーをチェンバロの響きを理解しないで弾いてしまうのは音楽としてズレています。音楽の本質を見るべきでミスタッチの個数で決めるべきではありません。どの楽器でもきちんと人に伝わる演奏が重要です。

(3) 拍子とリズムの正確さ

音価の正確さだけでリズムが適正であるかを判断できない場合があ

学生審査員に初挑戦!

り、時代様式の知識や読譜力も求められる項目。例えばバロック様式のイネガル奏法や、アドリブ的な要素が要求されるフランス風序曲のグラーベの付点リズム、ベートーヴェンの熱情ソナタ第一楽章の六連符、さらにスクリャーピンの複合リズムは、その割り切れなさが気だるい雰囲気醸し出す役割を果たしています。

(4) 適正なテンポ

時代様式が表現できているテンポが音楽的に良いと言えるでしょう。

(5) 非声部様式の場合

メロディと伴奏で出来ている音楽。メロディとバスラインのバランスが取れている中に、響きを補完する和音が弾けているか。メロディ以外の部分にも意識が行き届いているかも大切です。

(6) 対位法様式

声部が独立して聴き手に伝わるか。響きのバランスが崩れていないか。フーガであればその展開部と嬉遊部の緊張と弛緩のコントラスト。調や和音が変わるとニュアンスが変わるか。三声であればそれぞれ別の人が弾いているように聞こえるか。

これらの確に表現するのは難しく、差がつかやすすい項目です。

(7) 和声様式の場合

例えばショパンエチュード作品10-11やバッハ平均律第一巻第一番プレリュードなど、メロディがなぐ分散和音が連なる曲では調の変化や和声が意識できていないと単調になり、美しく表現できません。

(8) 時代様式

近現代以外は、原則として現代の楽器と性能が違います。バロックはパイプオルガンやチェンバロ、古典派はフォルテピアノ等、ロマン派も現代ピアノと同じではありません。響きを変える、ダンパーペダルの使用法や打鍵に注目しましょう。

(9) プログラムの構成

特級では通算80分以上の曲+コンチエルトを準備する必要があります。選曲の配列も重要です。例えば異なる時代様式や調性(長調と短調)を組み合わせる等。幅広い様式感やレパートリーがある方が、同じ完成度であればアピール度が高いでしょう。

(10) 暗譜力

(11) デュナーミクの変化
自然な揺らぎが表現されている

か。

(12) 情感の表現力

印象の強い演奏であることは大切ですが、勢いだけ良くて、転調しても色やニュアンスが変わらないのでは乱暴な演奏にしか聞こえません。

(13) 曲の構成力

例えばソナタ形式(提示部、展開部、再現部、コーダ)の中で、第1・第2主題のコントラストを付けているか、主題のキャラクターを捉えているか、提示部と展開部は緊張の度合いが違うか、再現部の第2主題と

提示部の第2主題の違いが表現できているか等。評価するには高度なソルフェージュ能力が必要です。

(14) ペダリング

残響の度合いを考えながら響きをコントロールしているか。天井の低い室内では残響が出ないが、ホールは残響があるので同じ具合で弾くと濁ってしまいます。

(15) 集中力

セミファイナルの50分間を、聴き手を飽きさせないで演奏できるか。ステージでの集中力や、聴き手に与える印象は大事な指標です。

(16) ステージマナー

演奏が今一つな時は身体に無駄な動きがある場合が多いが、逆に身体に無駄な動きがあっても音楽的に素晴らしいこともあります。見た目に惑わされず客観的に評価しましょう。

(17) 総合評価

全16項目を五段階で評価しますが、全てが同じ価値観を持っているとは限りません。それを考慮した上で、「音楽的に素晴らしいか」という直感で評価して下さい。



実際の演奏をどう聴いて評価する？

四期別・聴くポイントとは

2010年度特級セミファイナルを参考に

それでは、実際の演奏をどう聴いて評価すればよいのでしょうか。
金子氏のレクチャーでは、昨年度の演奏例を挙げながら、
四期別にポイントを説明して下しました。

バロック

「バッハ平均律クラヴィーア
曲集第2巻第23番ロ長調
BWV892
(黒石航紀さん)

◎様式表現(バロック)

極端な強弱はほとんどなく、ダン
パーペダルも少ない。様式表現とし
ては適切と考えられます。

◎対位法の表現はできているか？

主題が明確か、主題でない声部が
どれだけ音楽的か、四声体の響きの
バランス等を見ていきます。m19バ
スにテーマが主調E-durに出てき
ますが、最初と同じアーティキュレー

ションで弾くというフーガの原則を
守るのは難しい部分です。各声部の
独立や響きのバランスは良く、主題と
対主題も音楽的に弾かれています。
m7やm12で声部が交差していても、
混乱せずに独立して聞こえます。

◎音色の変化はどうか？

ある程度ソルフエージュ能力が
ないと評価が難しい項目。m9は
Fis-durからH-durに変わる部分
で一瞬窮りが出ますが、極端に変化
させることなく、美しく確実に変化
させています。m23のダブルシャ
ープ等は借用和音ですが、そこも微妙
に色を変えて弾いており、高い和声
の意識が感じられる演奏です。

古典

モーツァルト：ピアノ・ソナタ
第4番Es-dur KV282
第1楽章
(今田篤さん)

◎様式表現(古典)

音色は乾き気味な音で、楽譜に書
かれている細かいアーティキュレー
ションがほとんど守られていて、強
弱も様式感を守った上で確実につけ
ています。

◎ソナタ形式は理解されているか

提示部の第1主題(m1~m8)はEs-
durの少し曇った音色、それに対し
て第2主題(m9)は属調のB-dur

となり、明るい音でリズムも明確に
対比させています。再現部で第2主
題は主調Es-durに戻りますが、提
示部の第2主題とどう違うか。色が
やや曇っていて、5度の響きの違い
を完璧に弾き分けていますね。この
表現は構造的に美しく聴こえます。

◎非声部様式の扱いは？

再現部の第2主題で、メロディと
バスラインの響き、その間の和音の
バランスがよく取れています。m29
はバスラインを綺麗に残したいとこ
ろで、ダンパーペダルを使いすぎる
と様式感が崩れてしまいます。そこ
を彼は、左手のバスラインと主要な
和音を指ペダルで残して、美しくバ



2010年特級銀賞受賞の今井篤さん

学生審査員に初挑戦!

スラインと和声を保持しつつ右はレガートを保っています。古典派奏法の基本が守られています。

◎音色の変化は適切か?

転調や、短調のドッペルドミナント、イタリアの六度、六度調の五度など、特殊な和音を使っている部分はどのように色が変わっているでしょうか? さり気なく音色をどんどん変えています。やや控えめですが、古典派様式の中で今田さんが選択した幅の表現であろうと想像できます。

ロマン

シューマンⅡリスト..

『猷皇』

(梅村知世さん)

◎様式表現(ロマン派)

演奏は情感たっぷりです、それに合わせたテンポバートがあります。

◎非声部様式のメロディと

バスラインのバランスは?

伴奏が並行で動いているため、響きのコントロールを取りながら、メロディを美しく浮かび上がらせるのが非常に難しい曲です。第1主題は概ねバランスが良いですね。第1主



2010年特級グランプリ受賞の梅村知世さん

題の確保(m16)でテノールが出現した後はさらに難しくなり、特にm17左手のasが3回連打されて上のfに至る箇所は、メロディを保持しながら和音を弾くのが容易ではありません。m24はbから始まる左のメロディは *espressivo assai*、右は *assai calando*。メロディは消えてはいけませんが右は消え入るように。

◎音と歌詞は運動しているか?

歌曲では歌詞と音が運動しているのと和声や調の変化のヒントになり

ています。よく研究した上で、自然に表現されていますね。

中間部はm32のE-durで始まり

ますが、その前はAs-durで遠隔調への転調となるため、全く違う響きで始めるところ。したがってm31最

高音asとm32のgisの音のバランスも重要です。m43ソプラノcisが3回に続いて異名同音desから始まるメロディは、「Jebend」(愛されて)の歌詞があてられており、柔らかな響きに。響きのコントロールが難しいで

すが、全体として情緒豊かな美しい演奏でした。

近現代

スクリャービン:ピアノソナタ

第5番 Op.53

(今田篤さん)

◎様式表現(近現代)

作曲家の語法が多様化し、メロディ、伴奏、和声のような概念が融合し、渾然一体となっています。その中で楽譜上の指示を忠実に表現しつつ音楽的に演奏できているかがポイントです。

◎多様な標語の表現は?

3つの主題で構成されるソナタ。近現代はそれ以前に比べて、標語や強弱指示が増えます。冒頭「猛烈で風変わりな」、m13は「けだるい、物憂げな」等。さらに「傲慢に」「神秘的で苦しきもだえて」「愛撫するように」といったニュアンスを、今田さんは相当細かく表現しようとしている。音量ではなく、ニュアンスとして表現できています。和音の厚みがあっても固まらず、一番上のソプラノが聞こえてきますね。色々工夫が凝らされた演奏でした。

「自分も
お客さんに楽しんでもらえる
演奏がしたい!」

初めての 審査員体験談

～聴き方の変化が、
音楽へのアプローチを
変えた

すっかり音楽に夢中に

成家康太さん(中1)・悠太さん(中3)・
奥村圭輔さん(中3)

最年少での参加となった成家康太さん・悠太さん兄弟(中1・中3)と奥村圭輔さん(中3)。セミファイナル会場では目を輝かせながら7名の演奏に聞き入っていた。その後、3人はどのように変化したのだろうか。ご兄弟のお母様で奥村さんの指

導者でもある成家ひろこ先生(指導
会員)にお話をお伺いした。

「色々な曲を知るきっかけになる
ことと、審査が面白いと思って生徒
たちに薦めました。弟の康太の方が
ピアノが好きなのですが、結果とし
ては一緒に行った兄の悠太と奥村君
の方が刺激を受けて変わりました
ね。悠太はファイナル翌日の福田靖
子賞選考会も聴きに行くといい、『ど
の曲がいいかな』と自分で選んで楽

譜を何冊も持って一人で出かけまし
た。こんなことは今までありません
でしたね。レッスンでは先生方の英
語を頑張って聞き取り、楽譜に書き
込んで帰ってきました。また奥村君
はその後オーディオを購入したそう
です。二人とも図書館でCDを借り
て聴いたり、楽曲分析の本や作曲家
の伝記を読むようになり、音楽の面
白さに目覚めたようです。奥村君は
演奏も少し開放的になりましたね。」

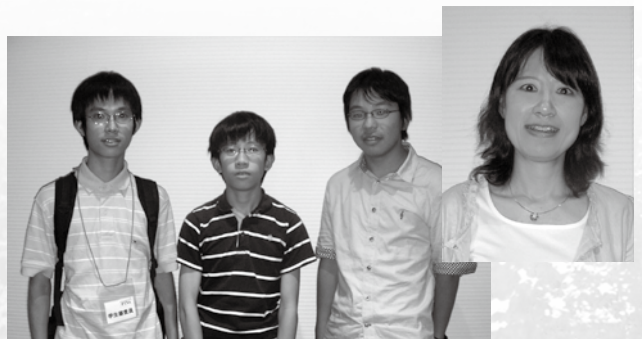
同じホール、同じピアノで、違う
人の演奏を聴くことは、3人とも初
めてだという。また当日会場で配布
された「審査項目表」を一つ一つ追
いながら聴くという体験も、もちろん
初めての挑戦。その柔らかな感性に、
7名の演奏の印象がしっかりと刻まれ
た。意見はそれぞれ同意する部分と
相違する部分があったそうだが、そ
んなデイスカッションも良い復習に
なったようだ。では3人はそれぞれ
どんな感想を持ったのだろうか。

「これまで時代様式という観点か
ら見たことがなかったので、その点
が勉強になりました。興味深い演奏
も沢山ありました。自分も、お客さ
んに面白いと思ってもらえる演奏

がしたいです(奥村さん)、「コンサー

トの聴き方が理解でき、もっと楽し
くなりました。ピアノに対してやる
気が湧きました!」(康太さん)、「ど
んな演奏がいいのかを考えながら聴
いて、自分の演奏を少し客観的に見
るようになりました。聴いている人
のことを考えるようになり、今まで
より曲の分析や作曲家についても調
べるようになりました」(悠太さん)。

3人は数日後に行われた特級ファ
イナルにも足を運び、すっかり協奏



成家康太さん(中1)・悠太さん(中3)・奥村圭輔さん(中3)・お母様の成家ひろこ先生

学生審査員に初挑戦!

学生会員の榊真由さん、前目に行われた事前レクチャーから参加した。「知らない曲をどう評価していくのか、というのが勉強になりました。項目の(6)(7)(8)※が特に参考になりました。例えば(6)(7)は構成力のある演奏なら時代がはっきりとわかります。また(8)だとマン派ではやはり様式感が違うわけ

知らない曲でも
聴き手に分かることが
多くあると実感
榊真由さん(高3・学生会員)

10代の感性は一つのきっかけでどんどん広がる。あの日、彼らの音楽人生にはたしかに大きな一歩が刻まれた。

曲にも夢中になって、終演後に皆と夕食を食べながら「いつか僕たちも協奏曲を弾きたい!」と大いに盛り上がったという。そして早くも来年2月に、2台ピアノによる協奏曲コンサートとして開催することが決定!好機を逃さずバックアップする、お母様そして指導者である成家先生の温かい計らいである。

で、知らなくても、聴き手に分かることがたくさんあるんだなと思いましたが。 ※詳しくは前頁16の審査項目

聴いただけで、ある程度の時代や様式がわかる演奏が出来ることすばらしいのかなと思いました。また『知っている』にも色々な意味があるんだということが印象に残りました。これは(12)(14)が特に参考になりました。以前は知っている曲だとペダルが濁っている、『家だときれいなんだろ?』と思うってしまうこと

もあったのですが、ペダルが濁っているままというのはホールでの微調整が出来ない!音を聞いてない?と思うようになりました。その会場で最高の演奏が(12)の感動の度合いにつながるのかなと今は思っています。さらにプログラムの重要性にも気づいた。「バロックや古典を中心に組み合わせたり、近現代曲に重心を置いたり、有名曲が多いプログラム等、約一時間のプログラムを組むには様々な方法があるんだな」と思いま

した。また自分も人に聞かせる、楽しませる演奏を意識するようになりました。最後に笑顔だところからも気持ち良かったので、演奏以外のステージマナーにも気をつけるようになりました。

レクチャー講師：金子一朗先生より

協奏曲の注意ポイント

オーケストラは楽譜を基準に演奏しているので、楽譜通りに弾くこと。テンポを自分勝手に揺らしてはアンサンブルが上手に成立しません。また自分がオケの伴奏をしている時は、どのパートがソロでどう響きのバランスを取るのか、またオケと自分が対等に渡り合わなければならない部分も見極めます。ソロパートを完璧に弾く上に、オケスコアを熟読して表現することが重要ですね。

プログラムの選曲と配列の重要性

プログラム構成によって同じ能力でも評価が変わることがあります。では得意不得意な曲がある場合、どのようにプレゼンテーションするべきでしょう? 1曲目はある程度経験のある曲を配置する方がよいでしょう。特に最初は「音楽的に正しいことができていくか」が聞かれるので、そこで審査員と信頼関係が作ることが大切です。50分の使い方としては、どこをメインディッシュに据えて全体を構成するのかを考えます。中央に自分が多少リラックスして弾ける曲を置くとよいと思います。

私は2005年度特級出場時、前半はシマノフスキのメトープ、後半はベートーヴェンのハンマークラヴィアを弾き、その間にショパンのノクターンOp.55-2を入れました。音楽的に簡単な曲ではありませんが、昔から弾いてきた曲だったのでプレッシャーが少なく、かつ前後の曲との緊張感のコントラストを生むという相乗効果もありました。



自分の演奏にどう生かす？

学生審査員結果と寸評

今後の取組みに向けて

金子一朗氏の寸評

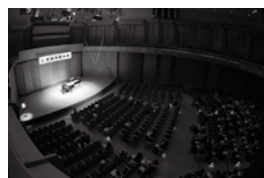
私も学生審査員の方々と一緒に、白熱したセミファイナルの演奏を聴かせていただき、とても勉強になりました。結果は奥村さんが1位ということでした。事前レクチャーを担当した私としては、とても興味深く、また、うれしい結果でした。もちろん、他の演奏者の方々の演奏が劣っているということでは決してありません。うれしさの最大の理由は、奥村さんの演奏が必ずしも派手ではなかったにも関わらず、学生審査員に高く評価されたことです。その理由は、奥村さんの演奏がとても知的なアプローチに基づくものだったからだだと思います。学生審査員の方々は、事前レクチャーで学習した16項目の審査基準で評価したとしても、それらのどれにどの程度比重をかけ

学生審査員の投票結果

※1位への投票=3点、2位=2点、3位=1点で集計

1位: 奥村百合名	67点
(1位投票=14票、2位=9票、3位=7票)	
2位: 内匠慧	60点
(1位投票=12票、2位=10票、3位=4票)	
3位: 菅原望	30点
(1位投票=5票、2位=6票、3位=3票)	
4位: 阪田知樹	25点
5位: 太田実花	20点
6位: 中川真耶加	11点
7位: 梅田智也	6点

ているかは人によって異なるでしょう。それでも、事前レクチャーで私が説明したいくつかの項目について冷静に聴き分ける力がなければ、こういった結果にはならなかったと思います。私の結果は必ずしも学生審査員の総合評価とは一致していません。しかし、ある部分ではとても共感できます。おそらく、その違いは、たとえば、近現代の作品では、私は手元で事前に分析した楽譜を見な



から演奏を聴いていること、また、多くの作品は自分のレパートリーで深く研究した作品であり、ある部分の演奏がどの程度の難易度かを知っていることなどから現れていると思います。コンチェルトの演奏の評価は、また別の評価基準がありますが、ソロの評価において、奥村さんは、16個の審査項目のうち、特に非声部様式、対位法様式、和声様式の的確な表現が評価されたのではないでしょう。また、バランス感覚に優れ、しかも、すべての作品に対し、楽譜と真摯に向き合って演奏されていたことも特筆すべき点でした。楽譜は作曲家の遺品ですから、それをととても素晴らしいことだと思います。セミファイナルになると、どの方の演奏も主張があります。その主張と作曲家の考えた世界の表現を、4つの時代すべてでバランス良く演奏することがとても大切で、そういう聴き方がある程度できたのではないか

あとがきにかえて ～「聴く力」が高まること

特級セミファイナル会場に集まった42名の学生審査員は、審査項目用紙とペンを片手に、前日のレクチャーで学んだことを思い出しながら、真剣な眼差しで7名の演奏に耳を傾けていました。ホールでの音の響かせ方やステージ上での印象もさることながら、時代様式や楽曲形式、プログラム構成といった観点を意識したことで、一歩踏み込んだ聴き方を体感できたことでしょう。

評価や結果よりも大事なことは、これを出発点として、自分の楽曲理解や表現を深めていくこと。今後もより多くの方に体験して頂ければと思います。

と思います。もちろん、演奏者によっては、セミファイナルで、4つの時代すべてではなく、自分の得意な時代、または作曲家を中心にプログラムを作る方もいらっしゃいます。あらゆる程度訓練すると、たとえば近現代の作品を聴いても、その人が古典やバロックを弾いたらどうなるかが類推できるようになります。

今回の経験が学生審査員の方々の演奏の向上につながることを祈ってやみません。